

モナシュ大学見学報告  
Monash University  
School of Languages, Cultures and Linguistics

吉田裕子・朴有眞・リュウ・チャイー

2004年7月3日

## 1 大学の紹介

### 1.1 Japanese Studies Program

モナシュ大学の日本語プログラムは、ビギナーコースから上級まで12レベルのクラスが設置されている。高校から日本語を勉強してきた学生はレベル3・4から入ることになり、上級レベルでは日本への交換留学もできる。現在、ここで日本語を勉強している学生は約1100人であり、その中では中国系が最も多いという。

### 1.2 Postgraduate courses in Applied Japanese Linguistics

修士課程は、理論のみ勉強する‘Coursework’と、論文を書く‘Research’コースで分かれている。日本人の留学生も30名ほど在籍している。(詳しくは、<http://www.arts.monash.edu.au/japanese/>)

## 2 授業見学1：3月16日(火) 午後3:00～4:00

クラス : Japanese language acquisition and use, tutorial(Japanese studies)

担当 : Robyn Spence-Brown 先生

学生数 : 約30名

見学者 : 伊藤, 柴田, チャイー, 朴, 本柳, 吉田, 林

### 2.1 授業内容

今期の授業が始まって3週間が経ったところだった。

課題論文を各自読んでいることを前提に、プリントにある質問にグループごとに答えを出してい

き，最後に担当講師がまとめる。

### 2.1.1 課題論文

Huter, K. (1996) Atarashii kuruma and other old friends-the acquisition of Japanese syntax. Australian Review of Applied Linguistics, 19(1), 39-59. Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. Studies in Second Language Acquisition, 18, 149-169.

## 2.2 授業の流れ

1. 担当講師からの説明
2. 小グループに分かれてのディスカッション (3グループ)  
Huter に関する設問が 3 題と Kasper & Schmidt に関する質問が 14 題。  
見学院生も含め約 10 名ずつのグループができた。
3. 各グループで出された意見を取り上げながら担当講師がまとめる。  
時間が十分になく，全部の質問を取り上げることはできなかった。

## 2.3 感想

課題を読んでいることを前提としている授業なので，読んでいない学生はディスカッションに参加できない。また，読んできても，グループの人数が多かったため全員が意見を述べることはできなかった。私が参加したグループでは特定の学生が意見を言い，話し合いを進めていった。設問数が多かったことも全員に発言の機会がなかった理由のようだ。意見を言いたくてもうまく語学的な理由でうまく話し合いに参加できない学生のために，もう少し少人数でディスカッションが行えればいいのではないかと感じた。設問シートがいつ配られたのかはわからないが，前もって配られると各人が答えを用意できるのかもしれない。個人的にはグループ内で話されている英語のスピードに全くついていけず，ディスカッションにも参加できなかったことは残念だ。担当の先生が選ばれた課題も興味深く，先生の情熱的な説明の仕方には引き込まれた。1 度しか参加していないのでわからないが，論文を読んで与えられた設問を考えていくという方法はとても勉強になり，力がつくと感じた。(吉田)

## 3 授業見学 2 : 3 月 16 日 (火) 午後 4:00~5:30

クラス : Postgraduate Japanese Sociolinguistics lecture/seminar  
担当 : Helen Marriot 先生  
学生数 : 約 30 名  
見学者 : 伊藤, 大塚, 柴田, チャイー, 朴, 本柳, 吉田, 林

## 3.1 授業内容

■テーマ 「日本社会言語学：日本語と英語におけるスピーチアクト」

### 3.1.1 (機能による) スピーチアクトの分類

脅迫的なスピーチアクト (“face-threatening” act, FTA)

調和的なスピーチアクト (“rapport-inspiring” act)

### 3.1.2 争いと厄介な情報を与える場合の研究

Beebe と高橋 (1989) 「“Do you have a bag?” : Social status and patterned variation in second language acquisition” (社会的な地位のパターンと類型の特徴についての第二言語習得)」について、方法論・結果・この論文の評価及び問題点について論じた。

### 3.1.3 訂正の研究

### 3.1.4 他のアプローチ・コミュニケーションパターンにおける異文化間のスピーチアクトの比較研究

### 3.1.5 批評的なレビューの書き方・提出し方

- 一つの記事 (article) の場合
  - 論文の要約
  - 長所と短所を検討する
- 考えるべき側面：
  - 研究の目的
  - リサーチクエスチョン
  - 方法論 (適切さや問題点)
  - 分析と結果
  - 解釈
  - 個人的な総合評価
  - 今後の研究課題への適用性や広げられる可能性の提言・提案
- 総合的な記事の場合：
  - 内容統一の重要性
  - ガイドラインの重要性

## 3.2 授業の流れ

プリントに沿いながら、担当講師の説明を中心とする進行であった。学生側からの意見を求め、クラス全員で討論するという進み方だった。

### 3.3 感想

留学生中心のクラスなので、授業のプレゼンテーションも配布物も非常に丁寧に扱われていると思った。例えば、ヘレン先生の話し方もニーズに応じてスピードを調節し、用語が簡単で分かりやすくしていた。プリントでは、専門用語に括弧で注釈を加えたりしている。教師側の工夫がよく分かった。授業の内容については、一人の研究者になるために最も基本的な知識及び力となる「批評すること」を具体的な例を挙げながら、分かりやすく説明されていた。「文献のレビュー」とは何か。自分が苦労した経験を思い出し、モナシユ大学の学生を羨ましくも思った。研究を始める人を導くような授業であった。

## 4 授業見学 (3) : 3月16日 (火) 午後 5:00~6:40

クラス : Japanese level 9 lecture/tutorial

担当 : Jun Yano 先生

学生数 : (個人指導)

見学者 : 伊藤, 大塚, 柴田, チャイー, 朴, 本柳, 吉田, 林

### 4.1 授業内容

テーマ : Popular culture について, 10 分の個人発表に対する指導

### 4.2 授業の流れ

個人指導。

一人一人の生徒が相談室に入り, レポートの進捗を報告する。それに対し Yano 先生が指導するという形で進んだ。指導の内容は主に以下のようなものであった。

- レポート作業の方向確認
- 進捗の確認
- 意見・ヒントを与える
- 励ます
- 興味を引き出す

Yano 先生はメモを取りながら, インタビューをし, 助手の方はより細かく記録をしていたようだ。

### 4.3 感想

Yano 先生の迫力が印象的だった。声は丁寧でもあり、同時に厳格にも感じた。話し方はとても聞き取りやすく、学習者にとってありがたいことだと言えよう。指導の仕方も一方的ではなく、生徒の考えや意見を理解しながら進めていたのが印象的だった。一人のインタビューしか見学できなかったが、非常に良い指導例を見せていただいたように思う。

## 5 授業見学(4)：3月17日(水) 午前 11:00～1:00

クラス : Advanced reading skills  
担当 : Kuniko Yoshimitsu 先生  
学生数 : 約 20 名 (早稲田日本語教育センターのレベル 7 以上)  
見学者 : 伊藤, チャイー, 吉田,

### 5.1 授業内容

主要教材 : Monash オリジナルテキスト (この日はこの教科書のみ使用), 速読の日本語  
その他 : プリント類, OHP

前回は行われた読解のテストがあまりできていなかったということで、テスト解説を中心にして授業が進められた。

### 5.2 授業の流れ

#### 5.2.1 語彙クイズ (マスメディアに関するもの)

■自学してきたもの (毎回実施) シートの下方に「よくできた」「ぜんぜんできなかった」など、5段階で自己評価する欄がついている。オリジナルテキストから出題されたもので、選択問題形式。終了後、終了時間を記入する。

難しい語彙が多く含まれている。クイズ解答後自己採点を行う。

#### 5.2.2 読解テスト「豪州で訪日修学旅行を開発」

OHP を使用し、間違いが多かった部分について順を追って全体で考えていく。その後、見学者を交えながら、自分で答えを確認する作業。

#### 5.2.3 オリジナルテキスト読解 (アフガニスタンに関する記事)

前回からの継続のもの。各自で質問に答えていく作業を行う。

### 5.3 感想

漢字が弱い学生が多いように感じた。理解漢字も少ないため、漢字から語彙の意味を推測できないことが読解力に影響しているようだ。学生からも「漢字が難しい」、「習ったけど忘れてしまった」、「質問の言葉がわからなくて答えられなかった」などの感想が聞かれた。しかし中には漢字がよくわかる学生もあり、クラスの中のレベル差がかなりあるので、授業を進めるのもかなり大変だと感じた。漢字が弱い学習者も話してみるとかなり流暢に話せるので、会話力と読解力に差があるように思った。すなわち会話はあまり問題ないが、「読む」行為には慣れておらず、漢字も弱いので意味を掴むのに苦労している学習者が多いと言えるだろう。

テスト解説の際、その問題だけではなく、応用が利くように配慮しながら行われていた点が随所に見られ勉強になった。

## 6 授業見学 5：3月17日（水）午後 5:00～6:00

クラス : Japanese Level 11

担当 : Hiroko Hashimoto 先生

学生数 : 約 13 名 (レベル 11)

見学者 : 伊藤, チャイー, 吉田,

### 6.1 授業内容

■主要教材 オリジナルテキスト オンラインタスクの部分

宿題として教科書に載っている「日本新聞協会」「国外の日本語新聞」等のホームページを検索し、興味がある記事をひろって、説明できるようにしてくる。2コマ続きの2コマ目に授業に参加した。

### 6.2 授業の流れ

1. 宿題の確認
2. 4人ずつに3グループに分かれ、見学者がそれぞれのグループに加わる。一人ずつ興味を持った記事について皆に説明する。他の人は質問をする。見学者が加わったため自己紹介から始める。
3. 見学者はグループを移動し、説明を受ける。

## 6.3 感想

日本人の学生も含まれていて驚いた。会話に関しては不自由がないが、読み書きに関しては問題があると話していた。学習者がそれぞれ自分でインターネットから興味のある話題を見つけてくるのはおもしろい。興味がある話題だからこそ一生懸命に話そうとしていた。海外の日本語新聞ではその国のニュースが出ているので日本語はわかっても内容が理解できない場合があることに学習者は気づいたようだ。この時間だけしか見学していないが、学習者の自律性を重んじた授業だと感じた。2回目は見学者だけがグループを移動したため、皆見学者だけに話そうとしていた。学習者も半分くらい入れ替えたほうがよかったのではないかと思った。

## 7 授業見学6：3月18日（木）午前10:30～12:00

宮崎里司先生の特別講義の聴講（モナシュ大学見学報告の最終項に別途報告）

## 8 授業見学7：3月18日（木）午後2:00～4:00

クラス : Japanese Level 11

担当 : Hiroko Hashimoto 先生

見学者 : 小暮, 柴田, 中野, 朴, 早川, 本柳

学生数 : 22人

### 8.1 授業の流れ

教材 : J-Bridge (小山悟 著, 凡人社)

テーマ : トピック : 「あのころ, そのころ」

1. Quiz : 前の授業の復習
2. Listening :
  - 本文のCDを聞く前 : 教科書の質問を学生に読ませる → 単語の確認 (例 : 長野県, 真中, 小さい, 自然, 泳ぎ, 幼なじみ, みずうみ湖など)
  - CDを聞く : 半分ずつ聞いて教科書の質問に答えさせた。学生が聞き取れなかった場合, 先生から学生にヒントを与え, 答えを助けた。難しい語彙はチェックをしてから聞かせた (ホタル, トンボ, カブトムシなど)
3. Dictation : 文法の確認をしながら, 少しずつテープを止め, 学生が書くようにした (穴埋め式)。→ 今日のポイントのある「というところ, あの(ころ), その, そんなに…」などを答えとして書かせた。
4. Reading : 早稲田の院生とグループになり, 役割を分担し, 本文を読む練習を行った。男性

が少なかったため、お父さん役の学生は2回読む練習をした。

#### 5. Group Discussion :

- グループを作り、院生と共に、今日学んだ文型を使いながら、自分が住んでいた町、今と違うところなどについて話し合った。(「私が住んでいたところは、～というところでした、その〇〇は…」など)

## 8.2 感想

私が参加したグループでは、オーストラリア人のほか、ギリシャやインドネシアのジャカルタから来た留学生と一緒にいたので、まずオーストラリアの「多民族」や「多様性」を感じた。大学1年生がほとんどであったにも関わらず、高校時代から日本語を学んだ学習者が多く、話はある程度できる学生もいた。しかし、漢字が苦手であり、振り仮名がついていないとテキストの漢字が読めなかった学習者もいた。グループ・ディスカッションにはみな積極的に参加していたが、日本語母語話者または日本語上級学習者がいっしょにいたことと、初対面であったこともその原因の一つではないかと思うが、やはり話の主導権がその人に移ってしまう傾向が見られた。1クラスの人数が思ったより多かったので、会話の練習をすることに難しさを感じた。

## 9 授業見学 8 : 3月18日(木) 午後4:00~5:30

クラス : Postgraduate Japanese Sociolinguistics lecture/seminar

担当 : Helen Marriot 先生

学生数 : 約30名

見学者 : 早川, 小暮, チャイー, 林, 朴, 本柳, 伊藤, 中野, 柴田

### 9.1 授業内容

学生のプレゼンテーション : 文献レビュー

### 9.2 授業の流れ

#### 9.2.1 ヘレン先生からのお知らせ : 課題レポートの書き方や提出方法の案内

参考文献のスタイルエッセイのフォーマットタイトルページと大学院のカバーページ(使用ジャンル) ひょうせつ剽窃について

#### 9.2.2 プレゼンテーション1

発表者 : Miho Nishita

発表内容 : Speech Acts (Cohen,1996)

- a. スピーチアクト論
- b. 社会言語学研究の方法論
- c. 最近の実証研究
- d. スピーチアクト論と教育
- e. 結論と考察
- f. 参考文献：Cohen A. (1996). *Speech Acts*. In S. McKay & N. Hornberger (eds.), *Sociolinguistics and Language Teaching*, (383-420). Cambridge: Cambridge University.

■口頭応答 発表の内容に「スピーチアクト論と教育」で取り上げた教授テクニックに対する質問があった。

a. 外国語としての学習と第二言語としての学習の状況の違いに関しては。

回答 もちろん、目標言語と接触するチャンスは多ければ多いほどが望ましいだろう。しかし、学習者自身の意志も考慮するべきだ。

b. 外国人相撲力士の例はどう解釈するか。

回答 (ヘレン先生)： 宮崎先生の公演で挙げられた例を利用し、発表の内容と関連した部分を説明した。

### 9.2.3 プレゼンテーション 2

発表者 : Chiharu Shima

発表内容 : *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese* (Mori, 1990)

- 1. 研究目的
- 2. 方法論
  - (a) 調査対象者
  - (b) データ収集の手順
- 3. データ分析
- 4. 結論
- 5. Implication
- 6. 参考文献：Mori, J. (1990) *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese*. Amsterdam: John Bejamins.

口頭応答 : 時間制限のため行われなかった。

## 9.3 感想

- 1. 見学院生が大勢訪れたため、教室は少し狭く感じたが、熱気に溢れていた。

2. 日本人留学生の発表が上手かった。明るく大きな声で、表情・ボディーランゲージ・ジェスチャーを使い、積極的な態度が伝わってきた。話スピードはやや速めだが、理解可能だった。補助物の利用（OHP）は熟練しており、発表の内容も理論的で、わかりやすい例を挙げ、個人的な考え・洞察を含めたものだった。大変面白かった。
3. 聴衆を上手にリードし、プリントに沿いながらフレンドリーに話してくれた。用意したOHPは少し読みづらかったのが、残念だった。